2015・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

36号

2015・6-2015・11

◉特集◉

1 旅する祭り
直江津祇園祭

2 座談会・まちのこと祇園のこと

巻頭エッセイ◉わたしの直江津
直江津の将来を思う独り言

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中❶
―春日山城国史跡指定八〇年によせて―

歴史は「今日」への手紙
「五智国分寺」の道標が見た人たち

直江津の将来を思う独り言

籠島　幹

「上越市立水族博物館」が二〇一八年にも新築するとのこと。どうせならあの辺一帯リゾート地にしてくれないだろうか。自動車学校や中等学校、たこ公園の敷地も使って温泉や温水プール、宿泊飲食施設、鮮魚センター、小さな遊園地を新設。水族館に屋台会館。高台から芝生広場のスロープを作って、夏は夕日コンサートやＢＢＱ、冬は子供用スキー場に。中等はいずれ縮小する直江津駅の敷地へ、ついでに鉄道科を併設。雇用も人口も増えるし、毎年水族館だけに訪れては帰っていく県外のお客さんが滞在してくれるようにしたい。

直江津には大人向けの和菓子等はあるが女性や子供うけする土産物がない。男性向けには酒や肴がある。土産を買うのは、女性や子どもが主体。自分用や友達用に買いたくなるスイーツやクッキーなどの「名物土産」が直江津には必要だと思う。

水族館は直江津の大きな観光資源。これを最大限に生かす。飼育数が日本一の「マゼランペンギン」。このキャラを作り、それを元にクッキーや煎餅などを作る。さらにキャラを立体化して、新幹線や直江津の駅でアピールする。

新しくできる水族館の海と夕日が見えるところに、「恋人岬」みたいなスペースをつくる。もう無理やり恋人達のデートスポットにしてしまう。敷地内に柵を設けてハート型のプレートを鎖と南京錠でくくりつけるようにする。とにかく、名前を書いて夕日に誓い合うんだ。マゼランペンギンのキャラは胸にでかいハートが入ってて、恋人岬（仮）のキャラも兼ねる。キャラは男女の二つセットでもいい。

少子高齢化。上越市の人口も二〇万人を切り減り続けている。子供も働ける人も減るばかり。子育て支援もいいけれど、その前に子供を作る夫婦を増やさないと。合コンを企画しても結婚願望が希薄なのか女性がなかなか集まらない。まじめでいい男はたくさんいるのに。

だから「独身税」を市で作ってしまう。男女共何歳以上で独身なら月いくら徴収って。それを銀

行で積み立てて、婚姻の時点で利子をつけて全額返金。いわば強制結婚資金積み立て制度。誰の懐も痛まず、結婚する欲求は高くなる。それくらいやらないと、人口が増えないと思う。

次はインフラ。山麓線から直江津駅前まで延びた道路をまっすぐ直江津橋方向へ繋げたい。南小学校は駅南に移転。跡地に「タワーマンション」を作って立ち退いた人を優先で入れる。地下は駐車場、一階は生鮮スーパー、上はマンション。駅前商店街の直線、道幅を狭くして歩行者のみの「オーバーアーケード」化。もっと商店を誘致して天気に関係なく買い物してもらう。

さらに直江津駅発着で環状線の「モノレール」を走らせる。吊り下げ式なら積雪の影響は少ない。駅ですれ違えば単線でいい。ルートはまず関川沿いに「あかね」に乗り継げる佐渡汽船乗り場へ。源入線門前通って物産センター前。市役所方面へきて春日山駅前、春日山の麓、加賀街道通って国分寺方面へ。そこから水族館近くに来てヨーカ堂通って、あとは直江津駅へ。頸城方面へ大きくまわってもいい。徒歩で観光や買い物用足しができる、高齢者にも優しい「コンパクトシティ」。二十一世紀にはこんな風になってると思っていたのになあ。

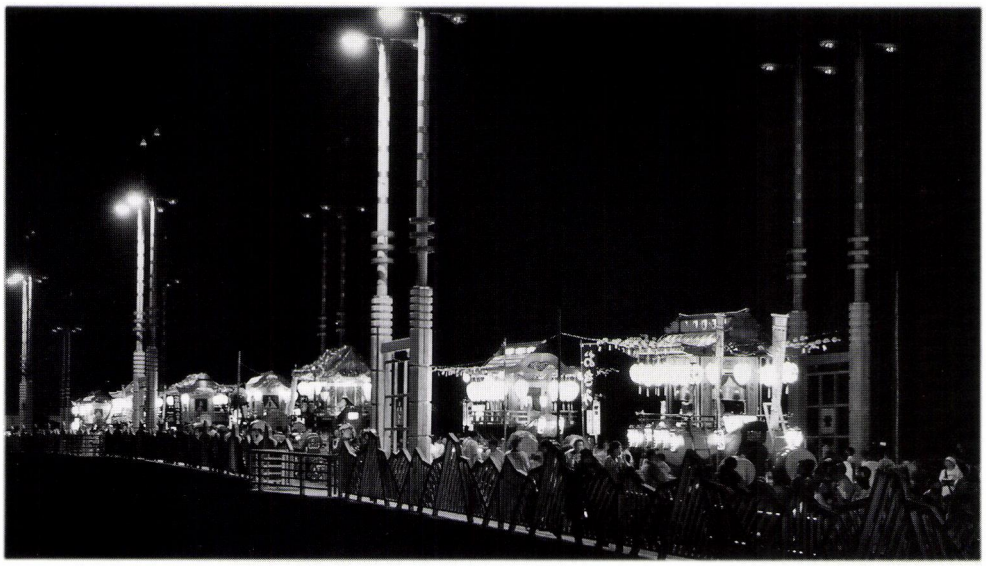
以前から自身のＦＢに綴っていた荒唐無稽な独り言を詰め込んでまとめてみました。
夢物語、と一笑に付すのは簡単です。一人ひとりが考えて、語り合ってみませんか。
直江津の将来を。



かごしまもときさん
直江津生まれの直江津育ち。
直江津小学校、直江津中学校、直江津高校卒。
夫婦で営むショットバー「なおえつ WHITE CATS」の店主。
特別な肩書きを持たずして直江津の一隅を照らす毎日。
実名でフェイスブックを利用。

特集1

旅する祭り 直江津祇園祭



荒川橋の上で神輿の還御待つ屋台（川下りの日に屋台が出るようになったのは昭和40年代）

祇園祭のルーツ

平安中期、国内は疫病や天変地異が打ち続き、怨霊の災いとして貞観五（九六三）年、初めて神泉苑で御霊会が行われた。しかし相変わらず災厄が続くのは牛頭天王の祟りとして、貞観一一（八六九）年、日本の国の数に準じて六六本矛を立て、その矛に国々の悪霊を宿らせて祓い、牛頭天王の神輿を出して神泉苑に送って祭り鎮めたのが祇園祭の起源とされている。

この牛頭天王は素戔嗚尊と一体のものであり、また京都の祇園祭で売られる粽に付けられた「蘇民将来之子孫也」の護符でも分かるように、素戔嗚尊は中国に由来する「蘇民将来」の説話とも結びついている。

祇園祭（会）と呼ばれるのは、牛頭天王が仏教の聖地である祇園精舎の守護神とされているためで、神社は神仏習合であるため「祇園感神院」または「祇園社」と呼ばれ、明治一年の神仏分離令で「八坂神社」と改称している。



「蘇民将来」の護符が付けられた京都祇園祭の粽

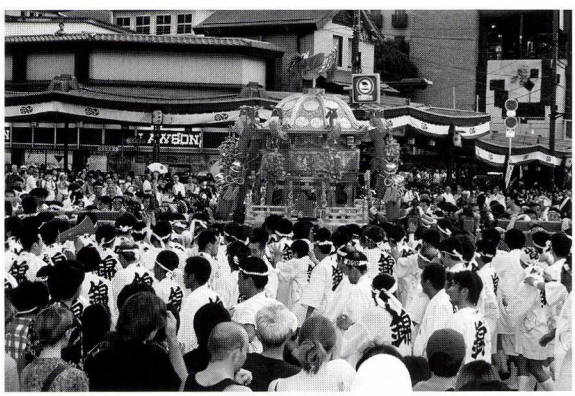
一説には、斉明天皇の時（六五六）、新羅の牛頭山に祭られている素戔嗚尊を遷座して祭ったのが祇園社の始まりだともいわれている。

直江津の八坂神社

直江津の祇園社はいつ勧請されたのだろうか。平安時代の末には勧請されていたのではないかといわれているが、御館の乱によって旧記などすべて焼失したといわれて史料がなく、唯一、明応四（一四九五）年の越後守護代長尾能景が「八王子戸田殿」に宛てた文書（『直江津町史』）が、祇園社の歴史を遡る手がかりといわれている。

祇園社は上杉景勝の会津移封によって廃絶の危機に陥ったが、直江津の町衆の援助で日吉神社の神官岩片氏が再興したと伝えられ、今日に至っている。なお、昭和三年に八坂神社と改称している。



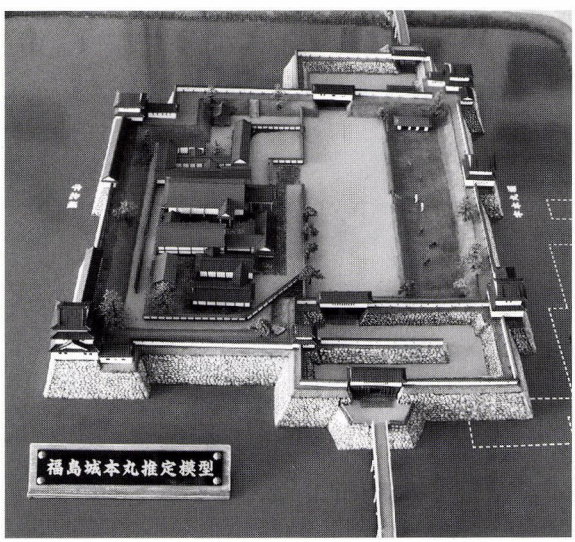


上　京都八坂神社本殿（江戸時代・国重文）
下　京都祇園祭の３基の神輿が市内を巡行して御旅所に向かう

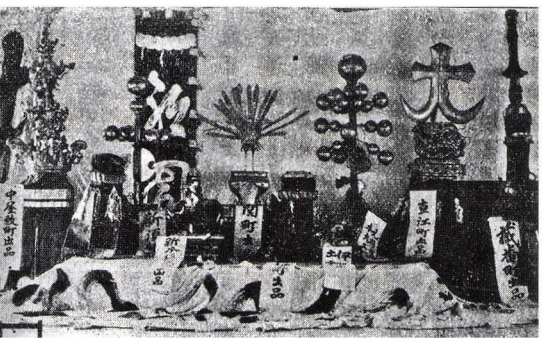
旅する祇園祭の歴史

高田築城によって城下町が移動し直江津の衰微を恐れた祇園社の神官は、藩からの百石の朱印地奉納を辞退し、その代わりに高田城下へ出向いて祇園会を執行することを願い出、許されて今日に至っているというのが、義人福永十三郎の伝承とともに、直江津の人たちの「拠って立つ」意識として有力な説になっている。

元和四（一六一八）年、高田藩から「恒例により玄米五石を寄進するので懇ろに国家安全を祈るように」という書状が出ていて、その四年前の慶長一九（一六一四）年に高田城が築かれ、二年後には忠輝は改易されており、替わって入った酒井忠勝家が、忠輝の頃からの「恒例に



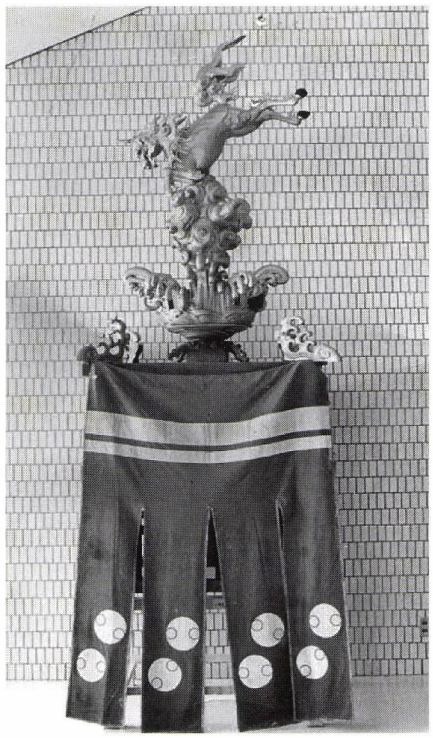
福島城ジオラマ（福島城を愛する会作製）



上　高田開府 300 年祭で出品された各町内の山車飾り

右　関町「孔雀」（上越市立博物館）





高田の祇園祭に出された山車飾り
伊勢町・出雲町「獅子牡丹」（上越市立博物館）

よって」と言っているのであろう。

一方、『頸城郡誌稿』に「福島城下でも執行した」と見えるので、祇園社の再興に堀氏の力添えもあって福島城下に出向くようになり、福島城に忠輝が替わって入っても行われ、高田移城後も「恒例」になって出張するようになったと考えられる。

祇園会（以下祇園）は七月六日、高田からのお迎えによって、神輿は車に乗せられて今町道を沿道の礼拝を受けながら陀羅尼八幡のお旅所に到着（古くはお馬出しのお旅所に入ったという）。翌七日は表通り（現在の本町通り）を伊勢町（南本町）まで巡幸する表祇園。夕方お馬出しのお旅所に入り一四日まで滞在。これは京都の祇園祭の神輿が四条の御旅所に一週間滞在するのと同じである。この間の夜を宵宮といい大変な賑わいだったという。

一四日は職人町（大町・寺町の一部・仲町・東本町）を巡幸する裏祇園。そして夕方、稲田橋畔で稲田の人たちによって御座船に乗せられ直江津へ環御する。

安永二（一七七三）年には雨天で神輿が環御できず山王社（日枝神社・高田駅西側）へ移したという記録もある。

この間の祭典費用は全て高田の町の負担であった。



江戸時代、高田祇園に出された山車はこのようなものであったと想像される
写真は五智の祭りの山車

祇園祭のにぎわい

豊年や景気の良い年には山車（飾鉾）や屋台が出され、安永三（一七七四）年には殿様がご覧になったという記録もあるが、城下最大の祭りの山車も慶応年間に途絶えたといわれ、どのような形態の山車であったかは分からない。

直江津での賑わいが見えてくるのは、文化元（一八〇四）年が豊作・豊漁だったので、紙細工で屋形を作り、迎え舟に乗せて神輿迎えに出たという真行寺の「智亮日記」の記録からである。

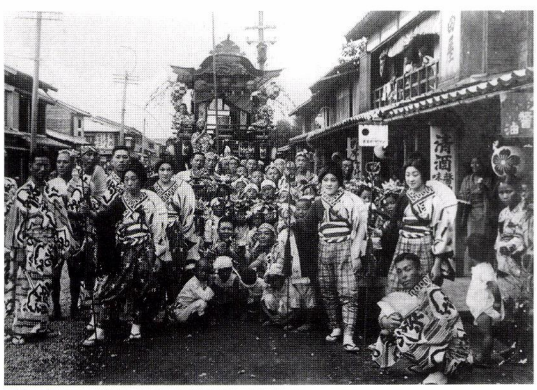
明治になると祇園祭の期間中連日、新聞で報道されるようになり、明治四四年の「高田新聞」には、「市内小学校は勿論各戸業を休みて戸々国旗琉燈を掲げ、店頭は小奇麗に飾り立て眩ゆき金銀の屏風を立廻し、赤の御飯に一日の歓を尽くせり……」と、直江津の賑わいを書いている。また、稲田からの川下りを鶴見大尉と共に「この希有の行事をレルヒ少佐が見物した」とも報じている。

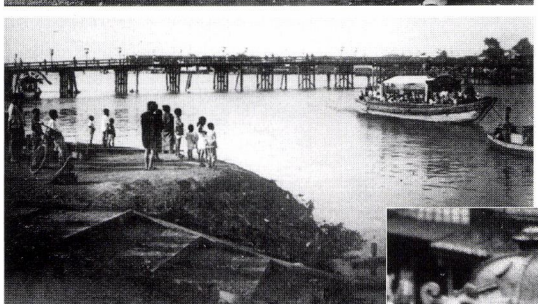
大正四年には迎え舟・見物舟で河口充満し「壮絶快絶の美観」を呈するだろうという記事が見え、二四区中、二一区が引船屋台を造り（二台も出す町内があって二四台になった）、浴衣姿の若衆は笛太鼓で拍子を取り、少年は火消し姿、少女は花笠の扮装で綱を引き、紅提灯の数は大空の星よりも繁く……。別の少年は小曳舟を担ぎ、芸妓連も屋台を出しとも書かれている。

このころから年々直江津の祇園祭が賑やかになり、趣向が凝らされて行き、現在のような祇園祭の原型が出来上がったようだ。



初めて車が付いた直江津の屋台　旧諏訪区







上　昭和初期の屋台　旧中島区
下　荒川橋畔　稲田へ神輿を迎えに行く迎え船が見える
右　法被姿の神輿勇み
白丁姿が消え法被に変わった
昭和 30 年代と思われる
いわゆる「よっかかり担ぎ」である


安国寺


荒川町


あけぼの

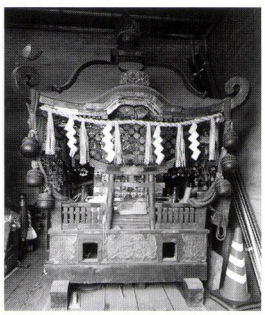

旭　区

19 町内御餞米奉納の景

今も旅する祇園祭







7月23日、氏子町内会長と高田から迎えに来た祭典委員によって発輿(はつよ)祭がおこなわれ、祇園の神様は神輿に遷座して高田へ出発する。

担がれることもなくなった明治初期に造営された祇園の神輿も見守る。



現在のように祇園祭の日程が変わったため、23日は、上杉謙信公拝領の「倶利伽羅龍」幟を掲げて妙高山へ登る「南方(なんぽい)さん」の到着報告が高田本町の春日神社で行われている。





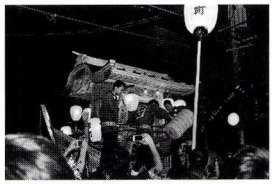
台車に乗せられた神輿は上越大通りと「今町道」をたどり、大曲から北陸道へ入り高田へと進む。



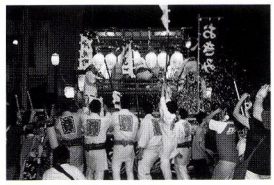
住吉町



塩浜町



栄　町

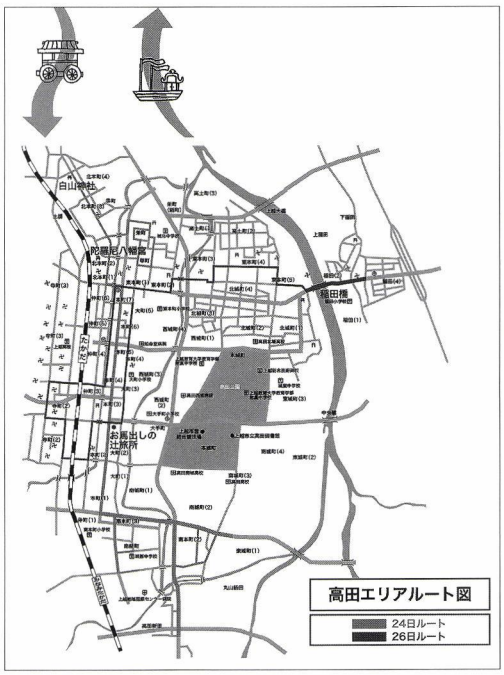


沖見町



石橋１・２丁目

高田地区神輿巡行コース



26日、台車で大町の出発地まで運ばれ、旧職人町を巡行する「裏祇園」。夕方、神輿は稲田へ渡って稲田町内を担がれるが、城下町ではなかったため今でも神官は同行しない。

夕やみ迫るころ、神輿は御座船に乗せられていよいよ直江津へ向かう。



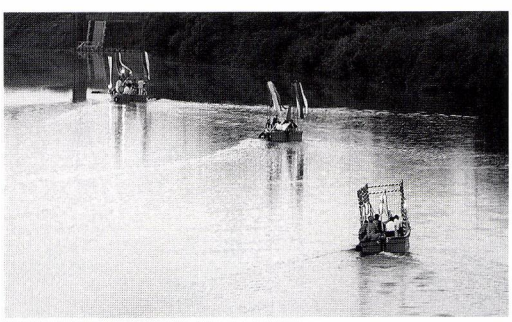
陀羅尼八幡の御旅所に到着。この夜、境内では相撲大会、カラオケや民謡大会が行われる。







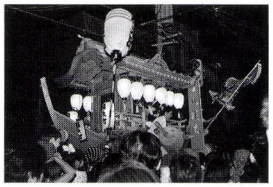






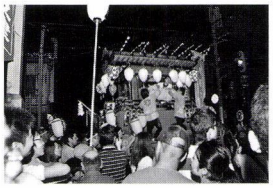
神輿が高田の入り口にある白山神社に到着すると、高田の祭典委員と地域の子どもたちが歌を歌いながら引いて陀羅尼八幡宮へと向かう。

24日は、本町通を南本町の伊勢町口番所の先まで巡行。帰りの御旅所への道は同じ道のため、台車に乗せられて戻る。25日は御旅所で一日滞在。


福永町


浜　町

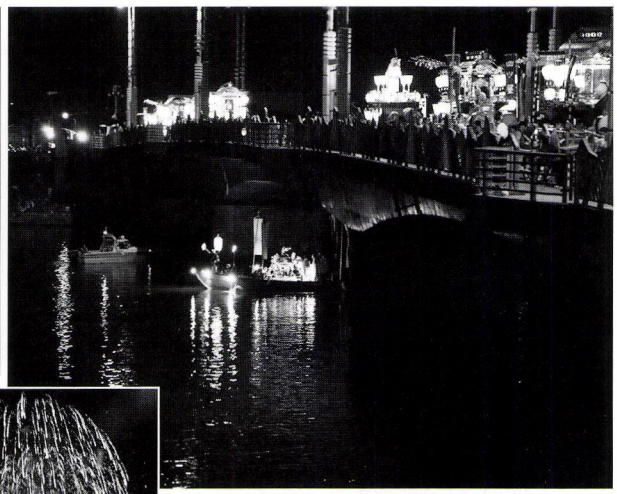

東雲町


天王町

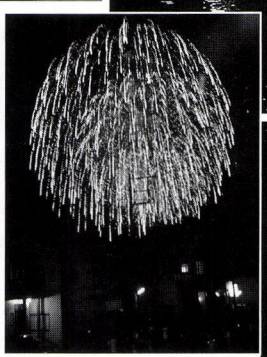

善光寺浜

歓喜







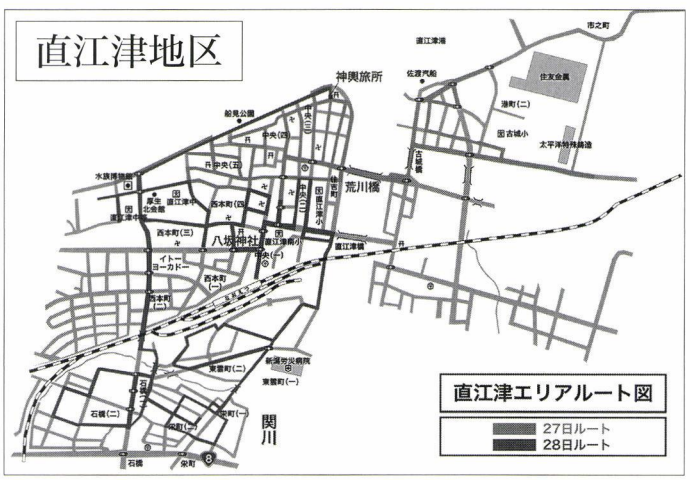


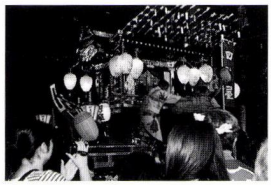


直江津では迎え花火が打ち上げられ、荒川橋に19町内の屋台が出迎える。御座船から上がった神輿は直江津地区連合青年会の若衆によって担がれ、御旅所のある荒川町に引き渡される。



27日、神輿は氏子町内を巡行し２８日朝まで御旅所に滞在。２７日の夕暮れ、各町内の屋台が御旅所の神輿を拝礼。




四ツ屋


八　幡


御幸町

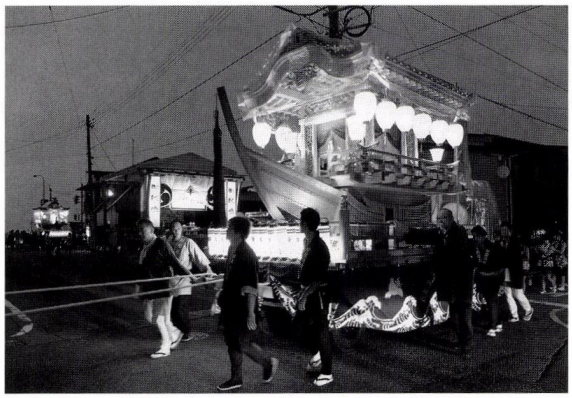

港　町


本町・横町

御饌米奉納写真・直江津地区連合青年会

歓声



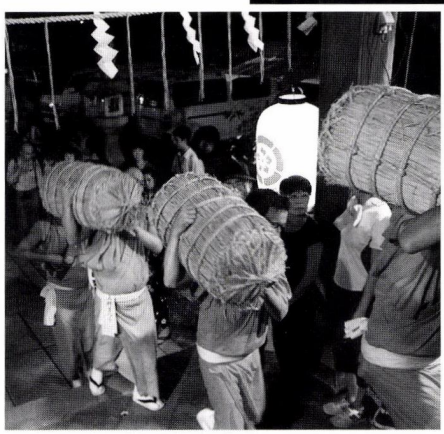


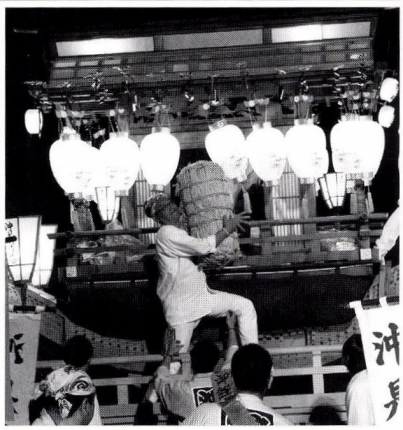
春日神社（春日新田）の祇園祭で担がれる屋台。直江津の屋台の原型を髣髴させる。











28日、残りの町内を巡行した神輿は、午後8時過ぎ御幸町の人々に担がれて還御。
29日夜、19町内の御饌米奉納を見守る人たちの歓声が上がるなか夜更けまで行われる。

特集2

まちのこと 祇園のこと

出席者
勝島寅一郎さん
柿村　徳成さん
平田　泰三さん
梅田　実さん

直江津言葉でいえば「ほっこ」で多少「がいちょ」にこのまちを牽引した明治生まれの先輩たち。
その先輩達から遊びのことまちのことを教えられて育った皆さんにお集まりいただいて、当時の思い出を語っていただいた。
今号では戦後の復興と高度経済成長へひた走り始める時代の直江津祇園祭の一こまを語っていただいた。

◆こんな時代でした

A　いろいろな場面で、松風園さんとかトンボさんに上がって、先輩の方々のお話を聞いたり、カラオケのない時代ですから、その席で民謡などを覚えたりしました。今、そういう席もなくなりました。そのような「文化」の時代を伝えておきたいということで、みなさんにお話しいただいて、「直江の津」の中で、形として残しておきたいと思いまして、お集まりいただきました。

B　そうだねー、民謡と言えば、まあなんといっても「いたこ」。カラオケのない時代でしたね。

A　勝島さんは頭の中に相当インプット……。

C　相当な数がインプットされているはずですよ。この『越後いたこ』ですが、小山直嗣さんが苦労して「いたこ」歌詞の春歌まで全部、採ってまとめたものです。今、「いたこ」を唄う場面はもう多くない。

B　あんまり聞かんなあ。

A　昔の新町だとか曙だとか、みんなお座敷に上がって、なんだかんだした時代でした。他の町内の方はお祭りの時でも上がりませんでしたね。

D　あんまり聞いてないねえ。

B　先輩の泉さんだとか富沢さんだとかいう方に連れられて、一杯飲みに行って、こんな飲み屋さんもあるんだなあって思ってねえ。まだスナックだとかもちろんなかったからね。

A　スナックなんて言わなかったですよね。

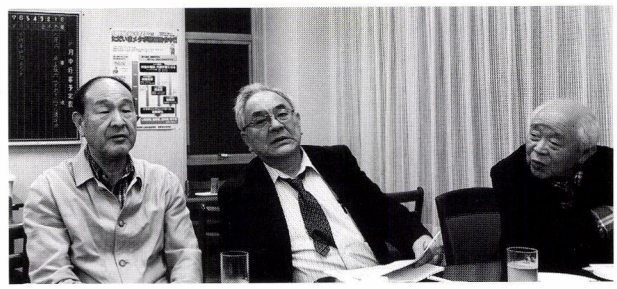
B　バー、トリスバーとかね、二軒ばかあったくらい。
それとエコーさんが盛んな時代ですね。

A　直江津の「商」の部分が元気だったころですね

◆「いたこ」と祇園祭

A　「いたこ」はいろいろな場面で歌われてきましたが、それにまつわる思い出はありますか。

B　お盆に今の厚生北会館でやったのを覚えています。幸村武郎さんが主になって、それでじゃあみんなやろう



「いたこ」について

長年、越後の民話を収集・研究してきた小山直嗣氏によれば、「いたこ」の源流を茨城県潮来の「潮来節」という説は誤りで、櫓漕ぎ唄「板子」が陸に上がって盆踊り唄になったものであろうとしている。

古い盆踊り唄の常として性的な歌詞がほとんどであり、歌詞も村ごと町ごとに違う。「越後いたこ」と言われるものは、ビクター専属歌手鈴木正夫が高田の芸妓から採譜し昭和30年にレコード化したものである。

ということで。確か一回しかやらなかったと思う。その後、八坂さんの秋祭りに信金さんの前で櫓を組んでやったね。それが民謡流しになっていくわけです。

A　八月二八日ですね。

B　その第一回目の時、櫓に上げられちゃって唄ったら、三味線、囃子方は波路会……。あとで波路会へ勧誘されてしまった。スピーカーで流れるもんだから、家内に「カンベンしてくれ」っておこられちゃった。（笑い）

C　すぐ分かるもんね。

A　直江津の祭りと言えば祇園祭ですが、御饌米を納めて屋台が各町内へ帰るとき、「いたこ」を囃して帰りますね。

B　昭和九年、荒川橋がコンクリートの橋になった時、新町の若い衆、若い衆ったって明治生まれの人たちが、屋台の囃子に「いたこ」始めたといわれています。



A　灯籠を乗せた舟形の屋台を担いでいたそうですが、「古老が語る直江津の昔」（柿村書店）に、古老の一人、宮崎お茶さんが、時代はわかりませんが「おら新川端町が一番最初に引っ張る屋台にしたんだ」と、おっしゃっていますね。

D　町内へ帰ると、こんど屋台から太鼓をはずして担いで、囃しながら、遊郭があった所を「いたこ」を唄いながら、ずーっと一周りして帰ってきたもんだ。

B　御饌米納めが終わると祇園祭が終わる。祇園囃子ができないから帰る時に流すってのが「いたこ」って、みんなが分かっている。その理由とか意味がなんだか分からん……。

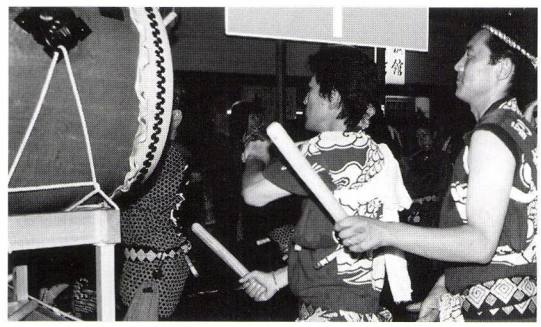
A　そうだね、太鼓や笛の囃子は分かっていても、どういう唄（歌詞）なのかというのは、恐らく分からない。

C　かもしらんね。

◆祇園囃子

B　昭和三〇年代に古老の祇園囃子を録音して、いわゆる「正調」を残すってわけではなかったんだけど。笛なんかもチャリを入れないで伸ばすと、遠音で聞こえるけれど、チャリを入れると近くはいいけも……。そんとき笛や太鼓をやった古老の間でも相当意見がちがったらしいからね実は。それを祇園祭協賛会が譜面にした。

C　ぜんぶ大太鼓から小太鼓から全部、図に入っている。笛も図に入っている。小さくはたけとか、大きくはたけとか。



B　それを屋台会館に各町内を呼んで、こういんだよっていうのをやったんだ。そしたらオラはオラの町内でいいんだ。オラ流でやるんだっていうことになっちゃって。全然、聞かんなだ。ひとつの伝統、正調なんだよっていうことを教えてやっているのに……。

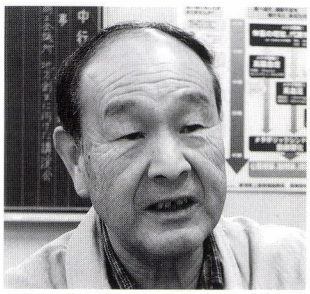
C　それは、一本にしてっていう話は随分前からあったんだ。だけど時代が変われば今風を取り入れる。だから太鼓だなんだ言ったって大変だわね。

B　それでも長年やってたから、今、昔みたいにゆったりしてきているわね。

A　そういえば、町内に入ったばかりのころは太鼓なんかはたかしてもらえなかったこて。

D　今は中学生ぐらいから。

C　子どもが少ないし、囃子方少なくなって、こんだ屋台の引っぱり手がいない。



B　昔は、「わっしょい」「よいやさー」ってせってさ、「よいやさ〜」は女の子が囃して、男はねじり鉢巻き、女の子は浴衣で引っぱったもんだ。今はそういうことはないね。

◆神輿のこと

A　女性が神輿を担ぐなんてことはなかったのに、女性を神輿の上に乗せてしまって、という問題もありましたが、男だって乗るなんてことはなかったから大変なことになった。

C　あの時「神輿を作りなおせ」だとか、すごいことに。

A　町内の人数が少なくなって、女性が担いでいいってとこもあるようだね。白い装束の「白丁」着ていればいいってな、あちこちにある。

B　女の人が神※輿担ぐせうのは、信用金さんもね。

A　昔、ありましたね。三年ばかり続いた……。

※昭和四五年に神輿の川下りを復活させようと曲師屋が造った軽量なものを担いだ。

◆底抜け屋台のこと

B　青年会は、せいぜい三五歳ぐらいで卒業したからね。

C　後ろがつっかえていましたもんね。

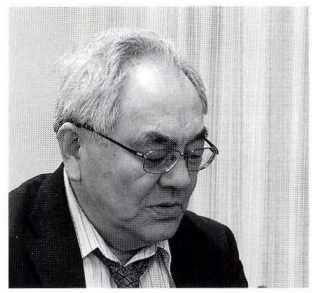
B　それで、底抜け屋台につかまるんだということで……。底抜け屋台を最初に運行する時、トンボにみんな集まって、底抜けの太鼓だとか囃子を稽古したもんだ。その時、芸者衆も来てくれて、それで練習したもんだ。その時に合いの手で覚えたのが「いたこ」なんだよね。

大先輩が芸者会して（みんな先輩の懐で）、その時に連れて行ってもらって。それで、ああ、こんなことして遊んでいいのかやって思って。いろんな遊び方を教えてもらって、その時に覚えた唄なんだよね。（笑い）

その先輩たちが亡くなった時、もうそろそろ「いたこ」無くなっちゃうから、録音しておこうかって、その時は

三味もいたし囃子方もそれぞれいたからね。じゃあやるかやね言ってるうちに、うやむやになってしまった。

観光協会の底抜け屋台と新町んのがあって、観光協会んのが駅前になって二台あった。そのうち駅前さんが辞めちゃって、こんだ古くなっちゃったから合体して一つにしようということで現在の底抜けになったんだね。



◆祇園には酒がつきもの

C　屋台を片づけるのは朝六時頃ですから、先輩が「お前ら、いっぱい酒飲んでもいいけど、朝、出られないような酒飲むな」って。当時、おっかなかったからねえ。

夜中に先輩の家に「お礼参りだ」せって、バンザイ、バンザイってせって、町内会長もせつながったこともあったねえ。

D　朝方にバンザイしているようじゃダメだこてね。（笑い）

A　やっぱりお世話になったらお礼言わないと…。

B　大分、続いたもんね。

A　今はもう、やってないと思います。やかましいもん。

祇園が終わって町内を「お礼参り」といって回るは全部「いたこ」ですね。

B　あの頃、祇園の期間中ずっと「浜町」で打ち上げ…。

四日間でいくら金つかったか…。

C　一人でいかないもんなあ。仲間といくから、みんな割り勘だ。

D　勘定を分割でお願いしたことがある。（笑い）

B　そうだよね、祇園の町内の浴衣着てれば、どこへ行っても全部ツケになるからさ。全部、後払いになって。

D　どこの町内かすぐ分かる。名刺代わり…。

A　トンボで終わって、そこから二次会、三次会。家に帰るが大体、朝日とともに。

B　そりゃ、新聞配達に会ったりなんかしてね。

C　会ったよね。（笑い）

B　いい時代だったねえ。

タクシーで高田の仲町へ行って飲んで、朝、高田駅でおまわりさんに「もしもし」って起こされた。（笑い）

D　でも悪いことしなかったね。

全員　そうだね。



直江津観光協会の底抜け屋台　旧中島通り
直江津観光協会は昭和 24 年に設立されている

直江津民謡

直江津いたこ

親も親だし世間も世間
　二十才過ぎても未だ居候
二十才過ぎても未だ居候
　三十過ぎても未だ居候
外へ出る時気を付けしゃんせ
　道に迷いの穴がある
越後見納め小出雲坂よ
　松が見えますほのぼのと
あらまあ大変だよ出雲さんか焼けた
　色の帳面茶々無茶だ
太鼓どんと鳴なりゃた目も覚める
　起きて格子にすがりつく
おまえそこかね妾(わた)しゃここよ
　そばに居ながらままならぬ
ままにならぬとお鉢とってなげた
　あたり近所は飯々だらけ
主と別れて松原行けば
　松の露やら涙やら
お前さんなり又私なり
　逢いたい見たいは同じこと
山で切る木は沢山あれど
　思い切る気は更にない
先は兄ちゃだし妾(わた)しゃ婿とりよ
　どうして下さる出雲さん
心意気さえ届いたならば
　青葉野田の一夜でも
来てはどんどん雨戸に障る
　心迷わす南風
想い出すようじゃ惚れよが薄い
　想い出さずに忘れずに
惚れて通えば千里も一里
　逢えず帰れば又千里
いたこ出島のまこもの中で
　あやめ咲くとはしおらしや
八幡通いをやめよとすれば
　またも来いとの文が来る
来いと言うとて行かりよか佐渡へ
　佐渡は四十九里波の上
波の上でも来る気があれば
　船にや櫓もある櫂もある
月はまん丸出てござれども
　主に逢わなきや真の暗
先で丸く出りゃなぜこちらから
　角に出ましょや窓の月

直江津甚句

アエーエ
参らんしょうや　地蔵さんの縁日だ
ア　踊らにゃノオ　婿やらぬ
　嫁さは御化粧がすきだ
ア　今朝またノオ　水かがみ
　アリャサノヤッサ
アエーエ
てかてか美赤い玉が　あがった
ア　お山はノオ　月吐いた
　おまんの顔　丸い丸いまん丸い
ア　十五夜のノオ　月の様だ
　アリャサノヤッサ
アエーエ
見えた見えた　白帆が見えた
ア　黄金咲くノオ　山見えた
　かけ橋架けたらよかろう
ア　四十五里ノオ　波の上
　アリャサノヤッサ
アエーエ
暗いのにおもかじさかてに走って来る
ア　直江津ノオ　千両丸
　おせおせ船頭もかこも
ア　港が近くなる
　アリャサノヤッサ
アエーエ
想へ出しゃ照る日も曇る
ア　連れなきゃノオ　闇となる

今頃起きてか寝てか
ア　思い出しでかノオ　忘れてか
アリャサノヤッサ
アエーエ
出せ出せ出さなきゃ破る
ア　出さなきゃノオ　かべ破る
月の夜に提灯とはなんだ
ア　ローソクやのノオ　孫じゃとて
アリャサノヤッサ

直江津小唄

相馬御風　作詞
中山晋平　作曲
藤間蔦枝　振付

唄の米山　夕日に赤い
明日もなぎだよ日が暮れる
ちらりちらちら　町の灯が招くぞえ
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ
今日も見た見た　荒川橋で
港出て行く船の影
沖にゃほのぼの　夢の国かょ佐渡ヶ島
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ
ゆかしなつかし砂山かげで
月を待ち待ち　月見草
星の涙か　ぬれてうれしや袖袂
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ
夜の荒川　御神輿が下る
川は万燈の迎え船
祇園囃子の　笛や太鼓で夜が明ける
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ
お前船のり　わしゃ浮寝鳥
どうせこの世は波の上
波の上でも　浮いた心じゃ暮らされぬ
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ
浪はどんと打つ　どんと打つ浪に
羽をぬらして鳴く千鳥
浜家暮らしは　とかく淋しい　夜が多い
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ
雪はふるふる　ふるふる雪が
雲の中から月が出る
名古の浦にゃ浪の花咲く千鳥鳴く
ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショナ



国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中 1

春日山城国史跡指定八〇年によせて

小島幸雄

はじめに

昨年は、高田開府四〇〇年にあたりさまざまな行事が実施された。今年も昨年ほどでないまでも、いくつかのイベントが計画されている。

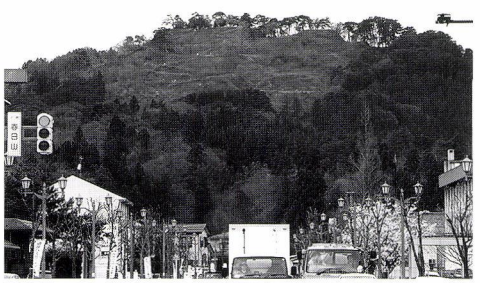
ところで、全国に知られた春日山城も今年節目の年を迎えたのだ。国史跡指定から八〇年となった。

そこで、今回は春日山城とともに越後府中を形成した直江津の町割りについて考えてみることとした。

史跡指定から八〇年の春日山城跡

春日山城は、昭和一〇年（一九三五）八月二七日に国の史跡に指定されたので、今年は指定からちょうど八〇年の節目の年を迎えたことになる。国が指定した史跡は全国で一六〇〇件余りを数えるなかで、春日山城跡は山城としては初期に指定されている。

春日山城跡の史跡指定は、現行の文化財保護法（昭和二五年、昭和五〇年一〇月改正）ではなく、その前身である史蹟名勝天然記念物保存法（大正八年）によって指定されたものである。ここで、上越地域にある国指定の史跡を挙げてみよう。糸魚川市は寺地遺跡と長者原遺跡（いずれも縄文時代）の二件、妙高市は斐太遺跡＊1（弥生時代）と観音平天神堂古墳群（古墳時代）に鮫ケ尾城跡（戦国時代）の三件が指定されている。上越市内に目を転じると、春日山城跡のほかに吹上遺跡・釜蓋遺跡（弥生時代から古墳時代）＊1と、宮口古墳群（牧区）と・水科古墳群（三和区）のいずれも古墳時代の群集墳があり四件となっている。これらの指定された年代を見てみると、史跡名勝天然記念物保存法によっている春日山城跡を除き、すべて文化財保護法によって指定された



杉を伐採し整備され、城郭の姿を現した春日山城跡

ものであり、長者原遺跡の昭和四六年を除けばすべて昭和五〇年以降に史跡となったものである。

なぜ、春日山城跡が上越地域で先んじて史跡になったのであろうか。この点を考えてみよう。

史蹟名勝天然記念物保存法には、施行令と施行規則、それに史跡名勝天然記念物保存要目なるものがセットとなっていた。筆者はそのすべての原典に触れているわけではないので、ここでは本文に必要な部分を挙げてみよう。前記の中で要目に史蹟（旧字のまま）の指定基準が示され、さらにその筆頭の一に都城跡、宮跡、行宮跡其の他皇室に関係深き史跡となっていた。また、三には古墳及著名な人物の墓並碑、そして四には古城跡城砦、防塁、古戦場、国郡庁跡其の他政治軍事に関係深き史跡と続く。このほかには、社寺の跡、教育学芸・社会事業・交通土木・旧宅や苑池、人類学や考古学上の遺跡、外国人関係、伝説地となっていた。もうお分かりであろう。天皇と皇室に関係する史跡が指定の中核となっていたのだ。

表（二六ページ）に史蹟名勝天然記念物保存法によって戦前に指定された史蹟のうち、城郭とそれに関連するものを挙げてみた。また、その時代を象徴するような日本史の出来事も少し掲げた。これを見ると一目瞭然で、戦前は史跡も歴史的な重要性だけでなく、謙信のように二度も上洛して時の天皇に拝謁を許されたことが春日山城跡の史跡指定につながったと考えられる。七尾城の指定理由に「上杉謙信が歌を詠んだ」とあるのもそれを裏付けている。

「タテ＝館」と「タケ＝竹＝館」

この数年、時間があると「タテ」と「タケ」という地名を探すようにしている。これまでに調べた結果を概観すると、米山より東では中世の遺跡地に「立」や「館」といった地名が多く見られ、頸城郡内では極端に減少する傾向がわかってきた。表（二六ページ）にした数字はあくまでも遺跡地図（新潟県教育委員会一九八〇）に載っていたものであり、確定した数ではないので傾向として理解していただくとありがたい。

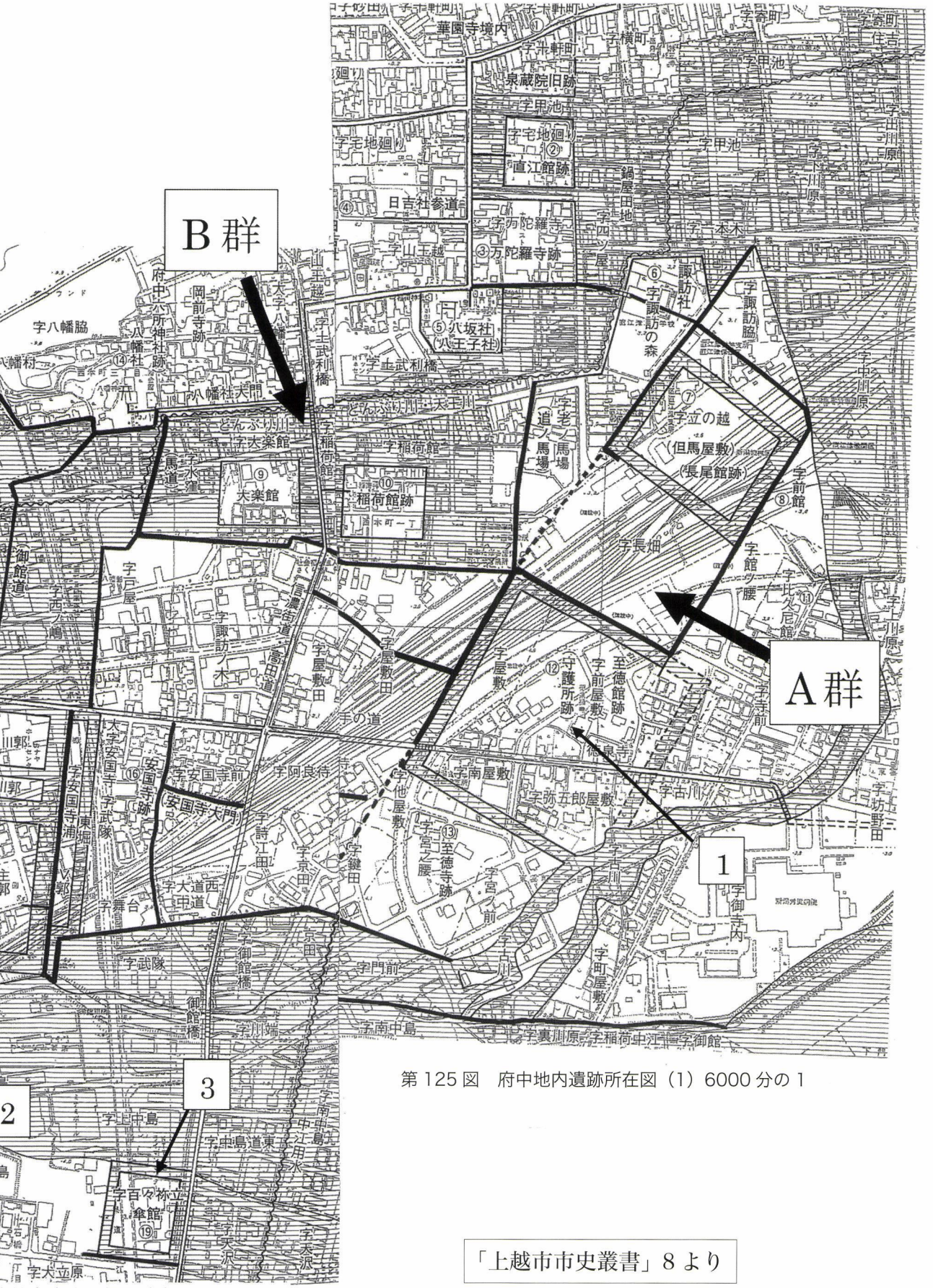
ところで、頸城郡内でわずか四か所にとどまっている遺跡地図の「タテ」であるが、図を見ると府中だけで八か所（前館を含む）の館地名があり、郡内で際立って多いことが見て取れる。この理由を以下のように考えた。

「タテ」は謙信政権になって以降に重要家臣団の位置を維持していた武将の館、「タケ」は謙信政権が成立した際に館が破却されたか府中に移住させられて廃絶した館とする。したがって、守護所は館とされず「タテ」の地名は残っていない。これは、いまだ完成を見ている分析結果ではないので、今後も継続する予定である。

なお、「タケノウチ（竹ノ内）」は頸城の平野部に多く見られる地名で、ほとんどで中世の遺跡が見つかっていることを付記しておく。

親鸞聖人の居所

「タテと「タケ」の地名を調べている過程で「竹之内草庵」がよぎった。今回の意図は親鸞聖人を題材にしたものではない。あくまでも、越後府中の上杉家の政権に移行、守護から守護代に政権に移ってから館の呼称が「タテ」から「タケ」に変化したことを明らかにしたかったのである。ところがそれを検討した結果、タテがタケに変化していた場合には、竹ノ内草庵を配流の住処としたとする伝説は、それなりの信ぴょう性、と言おうか補強することとなると思われるのである。ただし、現在の五

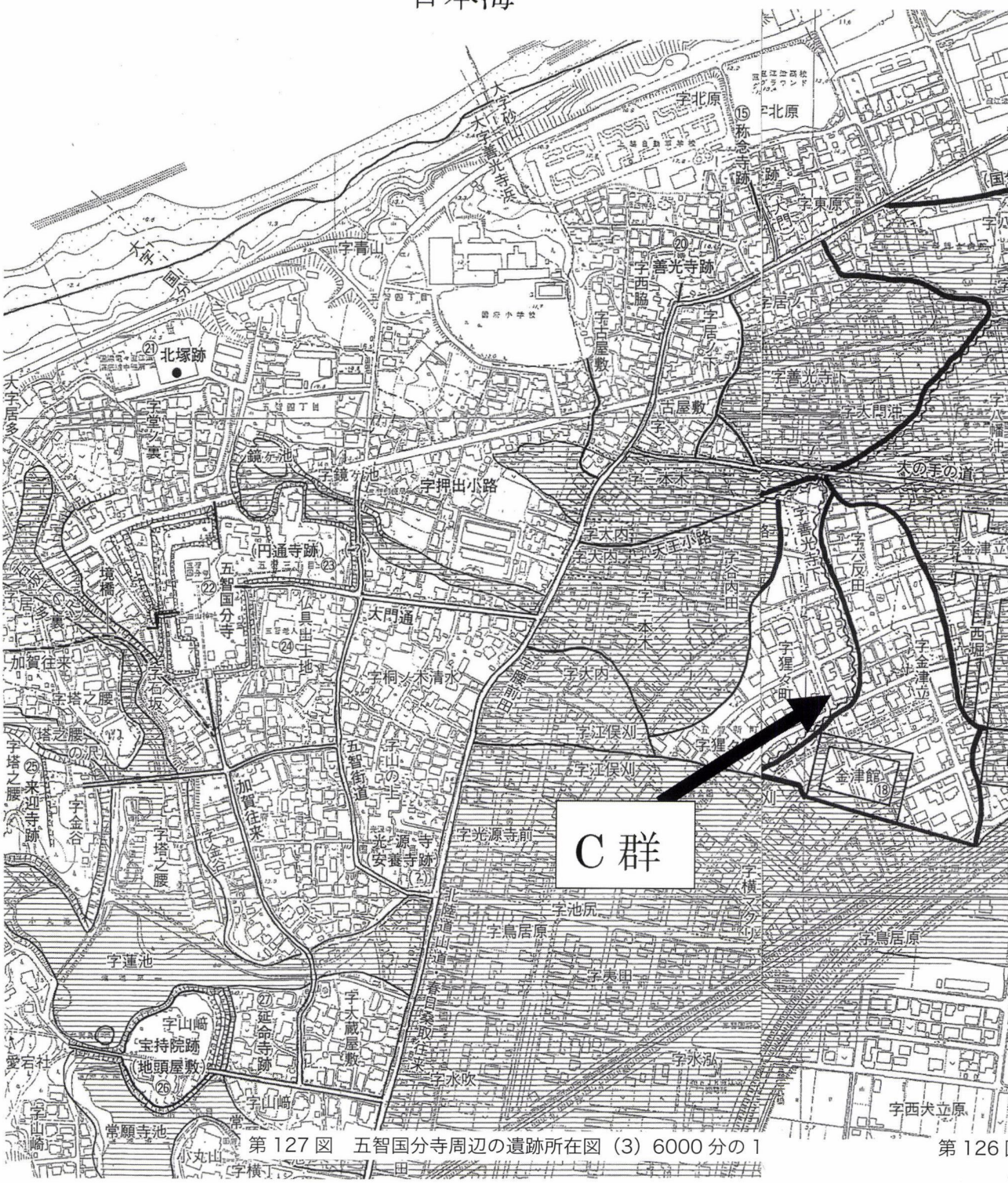


第 125 図　府中地内遺跡所在図（1）6000 分の 1

中地内遺跡所在図（2）6000 分の 1

「上越市市史叢書」8 より

1図



第 127 図　五智国分寺周辺の遺跡所在図（3）6000 分の 1

第 126 図

智国分寺にある土塁から推察する中世居館の存在から類推したに過ぎず、その年代等は闇の中であるのでこれ以上の深入りは慎まなければなるまい。

守護所の時代

前置きが長くなったが、ここから中世直江津の都市計画について考えてみることとする。

1図は、金子拓男氏が長年調査された成果を「市史叢書8」に掲載されたものである。直江津の都市計画がどのようになされたかを示したもので、中世後期の越後府中の姿を示すものと考えてよいものだ。

宝徳二年（一四五〇）、在京していた越後守護上杉房定が越後府中に入った。応仁の乱に嫌気がさしたなどと伝えられるが、ここでは触れない。

1図の1の場所が守護所と考えられている。現在の直江津駅からその南にかけて、約二六〇m四方の堀に囲まれた館があったことが分かっている。高田城の本丸がすっぽりと入る大きさで、東京ドームの一・五倍の広さであった。図を見てもここが突出して大きく、他の館の大きさからすると御館（図の2）の二倍、小さな百々祢（ももね）館（図の3）と比較すると約九倍の広さであったことがわかる。そして、他の屋敷と向きが大きく違っていることも一目瞭然である。

この館の主こそ、守護上杉房定と考えられるのである。平成四年から六年まで行われた発掘調査によって得られた資料は多岐にわたるが、堀が築かれた時代は一五世紀と推測でき、ちょうど房定が越後に下った時期と重なるのである。越後全域の発掘調査でもこのような大きな中世の館は見つかっておらず、まさに越後守護の館に相応しい威容を誇っていたと推測できる。

御館の時代

御館は、守護所より約三〇〇m西に位置する、越後府中では二番目に大きな館である。関東管領上杉憲政が後北条氏に追われて上杉謙信を頼って府中に逃げ延びた際に造営し、そこから御館と呼称されていたとされる。しかし、筆者はかねてから御館が憲政の館ではなく謙信の政庁であると述べてきた。それは、五智国分寺を御館の西に再興し、大門と呼ばれる東の門から東を望む位置に御館が築かれていることから推測したものである。通常、国分寺は南大門と呼ぶ南に面した門をもつものであり、東に入り口を持つものはない。現在は南に門があるが、これは江戸時代に入って加賀街道が整備されたことに伴って、街道を行き交う人々のために正面を変えたものであろう。

都市計画の変遷

この図からは、守護所とその北側にある館の方位の一群が見て取れる。A群と呼ぶことにしよう。これらは南北の軸がずいぶん東に傾いていることがわかる。位置も府中の東端にあって、関川に近く御館川の流路に接していたらしい。発掘調査でも堀が川にまで伸びていたことがわかっていて、川によって削られたのか、それとも川とつながっていたのか知りたいところである。筆者は後者と推測していて、船着き場があったのではないかと思っている。

次に、A群の左にほぼ南北軸を北にとる館群がある。B群と呼ぶ。砂丘に位置するこの一群には、曼荼羅寺などがあり、古い様相を示しているものと考えられないだろうか。後出のC群と方位が似ているようにもとれるが、この軸を規定しているのは砂丘列斜面の傾斜角であ

り、C群との因果関係は認められない。

さて、C群は御館を中心とする、伝承からも最も後出の館群である。その位置にも注目したい。A群はC群同様標高が低い。しかし、関川が労災病院の東で大きく蛇行していることからわかるように、関川の水ですら容易に上がらない場所なのだ。労災病院はそれより下位の土地に建てられているので、ここでいうA群と標高差があることをご理解いただきたい。しかし、C群はA群と同じ程度の標高を示しているが、地形的には砂丘の後背湿地、いわゆるラグーンと呼ばれる土地で湿地帯なのだ。今も流れる天王川は砂丘と後背湿地の境を流れるもので、湿地に水が流れ込むことを防いでいたのだ。

守護所（A群）と御館（C群）の立地条件

A群を見てみると、前述のように関川で形成された自然堤防であり、それによって関川が現在みられるように蛇行しているのだ。北流して東に向かって蛇行する関川で形成されたことで、土地の形状が南西から北東に向かって伸びていることがわかる。そして、北側には砂丘の後背湿地がのびていて砂丘との結界を形成し、西側にも湿地帯が広がっていたと推測できる。さらに、南には御館川（現在は御館川と呼ばれるが、当時は御館川を合流して正善寺川が流れ込んでいた。）が流れたていたため、独立した丘状の土地であったであろう。

このような土地の条件下で館が造成されたことで、都市計画の基本である道路が南西から北東に延びることになり、館も道路に規制された軸線となったと推測できる。

御館のC群を見てみよう。

こちらはほぼ北に軸線がとられている。その理由は、砂丘列の方位によって求められる。砂丘が東西に延びることで、砂丘によって遮られて形成される後背湿地は自ずと東西に延びるように規制される。御館が造営されたC群の土地は、後背湿地の南側で正善寺川によって形成された自然堤防にのっているのだ。したがって、C群もA群同様に北が後背湿地、南が御館川によって結界が設けられた、いわば自然の要塞のように独立した土地を形成していたことが推測される。このような形状の土地に都市計画された土地は東西に軸をもつことになり、御館はその道と平行に造営されたことになる。

このように、A群とC群は位置を移し、時代も経てはいるが、自然条件として南に御館川、北に後背湿地を持つ自然条件は同じであったことがわかってきた。まったく時代は異なるが、初期の信越線が敷設された場所を見ると、まさにA群の自然堤防を利用していたことがわかる。現在の東雲町から新光町を経て春日山駅に至るルートは、まさに一五世紀に都市計画された南北軸であったのだ。そして、C群には現在のトキメキ鉄道が走り、かつての信越線がここを走っていたことは、一六世紀の都市計画そのものなのである。

国府の津

奈良時代の国府は、三郷地区が有力だとされて久しい。三郷地区が有力だとする理由の一つに関川があげられる。それは、郷津は国府津が変化したものと考え、郷津から関川をのぼって三郷地区の今池あたりに舟を着けたものとするのだ。筆者も学生時代の四〇年以上前に三郷地区国府説に接した一人である。西頸城出身の筆者は、とても新鮮で理路整然とした国府＝三郷説を受け入れていたことを思い出す。当時は、吉田東吾が明治時代に提唱した越後国府＝中頸城郡春日村説が定説化していたた

が、弥生時代の釜蓋遺跡でも川を利用した物流が想定されているのである。

国府の津が郷津であることは、異論をはさまないであろう。それは「韻」だけでなく、自然地形によってもうなずけるのだ。郷津は、いわゆる風待ちの湊であって、それ以東米山まで頸城平野の砂丘では風待ちできる海は存在しないからである。郷津で船から舟（艀）に移された物資は日本海を東に進み、関川の河口から平野に入ったことは万人が認めるところであろう。しかし、関川を入った舟がどこから支流に入り、そしてさらに国府に引き入れられたかを考える必要があるといえよう。

直江津の都市計画

直江津は、砂丘・後背湿地・関川・御館川によって規制されて都市計画が行われてきた。その成立時期は必ずしも明確ではないが、一二世紀後半にはすでに直江津に越後国府が移動したであろうと考えられている。その理由は、親鸞聖人の竹ノ内草庵に対する私見においても述べておいた。

ところで、最後に直江津の都市計画で最大の疑問というべきか、それとも課題というべきか、東西に延びる大道について記しておこう。

この大道は今でもその片鱗を見ることができる。まずは東雲町の徳泉寺の北側からケアハウス至徳路あたりにかけて、線路をこえて安国寺（西本町二丁目）あたり、そして五智三丁目である。

平成五年だったと思うが、この道の下にある守護所の堀を発掘調査したことがあった。出土品は唐津焼が主であり、その年代は一七世紀初頭と考えられた。上杉氏の会津移封以降と考えたのだ。しかし、図の作者金子氏は



郷津湾の景観

め、三郷説はほとんど受け入れられていなかったようである。筆者が上越市に来た昭和五二年の市勢要覧では、越後国府の町として上越市を紹介し、「国府は五智に所在した」とあった記憶がある。もちろん、書き直しを含めて進言したものの、それはあくまで学説であり市民権を得るまで待つ必要があると返答があった。また、それも正しい。もちろん、今は奈良時代の国府は三郷地区が有力とし、平安時代から中世にかけての国府、府中は五智付近とする説が主力である。

ところで、最近少し疑問に思っていることがある。関川を重要視するあまり、その支流や遺跡で見つかる溝というには大きく、川というには小さな遺構を見落としてはいないだろうかということだ。新幹線上越妙高駅や周辺の区画整理事業によって発掘調査された「用言寺遺跡」は、川の蛇行に規制されるように倉庫群と目される建物が扇形に配置され、矢代川を利用した物流基地であったことがわかっている。時代は中世のものだ。下馬場には青田川を、向橋には儀明川を利用したであろう舟運の基地と目される遺構が見つかっている。時代はさかのぼる

この道を御館造営の時期とし、筆者の意見を聞き入れなかった。今でも二人の見解が歩み寄ることはない。金子氏は筆者の恩師であり、恩師と論じるのは楽しいものである。時には罵声を浴びてはいるが、それも見解の相違の範囲なら楽しみを超えることはない。

筆者は、次のように考えている。謙信は、御館の造営にあたり東西の道を計画し、館を道路の南側に造営した。守護所の西に館を造営したのは、守護所の持っていた権益を移すこと、すなわち越後守護上杉氏が掌握していた物流の権利を守護所から御館に移すことであった。したがって、御館川を利用して郷津から運び入れていた物流構造を移すことが目的だった。移さざるを得なかったのは、謙信が越後守護上杉家を継承しておらず、あくまでも関東管領であったがために、国主待遇を幕府から承認されていても守護所は使用できなかったのであろう。したがって、守護所に隣接して機能が保証された土地を選び、やや規模を縮小しながらも権利を主張できる土地を手に入れる必要があったのだろう。

道は御館と同時に造られたが、謙信は断絶した守護上杉氏の館を蹂躙することなく道を迂回させていた。その道は往下の橋に続いていた。橋は交流の基本であり往来する人は御館の前を通ったことになる。

図で復元された道は守護所の上を横切っている。明らかに守護所が破却されたことになっている。この時期も確実な答えは得られてはいないが、江戸初期を大きくくだらないのであろう。

国府と川 ― 結びに変えて ―

越後国府は三郷地区から直江津・五智地区へ、そして福島城下町を経て高田城下町へ移った。その立地を見ると全て川によって規制されていた、言い換えれば川を利用することが国府の立地条件だったことがわかる。その基盤をなしていたのが国府津＝郷津であったことは確実である。

そして、関川の流れは平野を潤したばかりでなく、物流の基盤として越後国府を支えたのだ。しかし、その支流に、そして遺跡から見つかる小川をもっと注視することによって、越後国府の様相が見えてくるような思いがしてならない。

北陸新幹線が開業し、北陸・上信越の両自動車道が交差する時代である。川を利用した物流に思いを馳せる時代ではないのかもしれない。しかし、直江津の港には「あかね」の白い船体を見ることができる。今一度、港町、物流の町直江津を考えてみたい。

コラム

＊1　文化財の点と件

吹上遺跡と釜蓋遺跡は遺跡としては別のものであるが、法律でいう史跡としては妙高市の斐太遺跡と三か所の遺跡が一緒になって一件の指定史跡となっている。したがって、名称の名称も「斐太遺跡群　吹上遺跡・斐太遺跡・釜蓋遺跡」となっている。

文化財の指定は件として呼称されるが内容は点数で示され、今年三月に県の文化財に指定された「吹上遺跡出土品」は、件数としては一件だが内容は一三二〇点で構成されている。

（上越市専門学芸員）

この一覧は、史蹟名勝天然記念物保存法が大正九年に制定されてから、昭和二〇年八月一五日までに指定されたもののうち、城郭や墓に関係するものを抜き出したものです。この他に明治天皇行幸碑など明治天皇の聖蹟が昭和八年頃から一〇年頃までと、一四年から一八年頃に指定されました。見落とし等、不完全と思われますが、当時の世相を大まかに示すものと思われます。

なお、明治天皇の聖蹟については、第二次大戦後進駐軍によって指定解除の措置がとられました。したがって、現在も碑は存在しているものの、当時の文部省の通達によって一切の行政関与が禁止されているため、放置されているのが現状です。

（二〇〇九・一〇・一八小島幸雄作成）

新潟県における中世遺跡の所在地

地　域	城・ジョウ	館・立・タテ
柏崎・十日町以東	114	65
頸城郡内３市	44	4

戦前の国指定史跡の城跡一覧
（1945年８月15日以前、指定順、一部墓含、天守閣などの建造物は除く）

戦前の国指定史跡の城跡一覧

（1945年８月15日以前、指定順、一部墓含、天守閣などの建造物は除く）

県名及び歴史事項	史跡名など	百名城	指定年月日など（西暦の下二桁から記載）	備考（指定の理由等）
史跡名勝天然記念物保存法			１９．０４．１０	
北海道	五稜郭	●	２２．１０．１２	渡島の経営拠点、戊辰役
第１回建国祭			２６．０２．１１	
滋賀	安土城跡	●	２６．１０．２０	
神奈川	上杉憲方墓		２７．０４．０８	
岡山	高松城		２９．１２．１２	
愛知	長篠城跡		２９．１２．１２	
岐阜	高山陣屋跡		２９．１２．１７	
福井	一乗谷朝倉氏遺跡	●	３０．０７．０８	
長野	松本城跡	●	３０．１１．１９	
岐阜	関が原古戦場		３１．０３．３０	
東京	江戸城外堀	◎	３１	
満州事変			３１．０９．１８	
５．１５事件			３２．０５．１５	
愛知	名古屋城跡	●	３２．１２．１２	
国際連盟脱退			３３．０３．２７	
島根	富田城跡	●	３４．０１．２２	
静岡	山中城跡	●	３４．０１．２２	
北海道	四稜郭		３４．０１．２２	
商務大臣辞職			３４．０２．０８	足利尊氏の賛美が原因
大阪	千早城跡	●	３４．０３．１３	楠木正成の城
大阪	赤坂城跡		３４．０３．１３	同上
福井	杣山城跡		３４．０３．１３	新田氏に呼応
長野	龍岡城		３４．０５．０１	五稜郭と同じ構造
茨城	関城跡		３４．０５．０１	北畠親房の城
茨城	大宝城跡		３４．０５．０１	賊軍に対抗した
秋田	平田篤胤の墓		３４．０５．０１	尊王思想に影響大
北海道	志苔館		３４．０８．０９	蝦夷地の経営
群馬	金山城跡	●	３４．１２．２８	新田神社あり
長野	上田城跡	●	３４．１２．２８	徳川軍に対抗
石川	七尾城跡	●	３４．１２．２８	謙信の詠が著名
福島	若松城跡	●	３４．１２．２８	戊辰の役の跡
埼玉	鉢形城跡	●	３４．１２．２８	戦国の城跡完全
東京	江戸城	◎	３５	
北海道	松前氏城跡	●	３５．０６．０７	渡島の倭人進出
茨城	小田城跡		３５．０６．０７	親房神皇正統記著述
岩手	九戸城跡		３５．０６．０７	南部氏の拠点
福井	白山平泉寺旧境内		３５．０８．２７	楠木正成の墓がある
新潟	**春日山城跡**	●	**３５．０８．２７**	**上杉謙信の居城**
２・２６事件			３６．０２．２６	
三重	多気（タゲ）北畠城跡		３６．０９．０３	北畠氏の城
大分	岡城跡	●	３６．１２．１６	足利を撃破した城
広島	福山城	●	３６．１２．１６	
文化勲章制定			３７．０２	
岩手	盛岡城跡	●	３７．０４．０１	南部氏が明治まで居城
「国体の本義」編纂	文部省		３７．０５	
滋賀	小谷城跡	●	３７．０４．１７	浅井氏の城
日中戦争			３７．０７．０７	盧溝橋事件
山梨	武田氏館跡	●	３８．０５．３０	武田氏の城
神奈川	小田原城跡	●	３８．０８．０８	後北条氏の城
福岡	怡土城跡		３８．０８．０８	外国撃破
愛知	大高城跡		３８．１２．１４	
青森	浪岡城跡		４０．０２．１０	伝北畠の末裔の城
広島	毛利の城跡		４０．８．３０	
東京	蒲生君平墓		４０．０７．２１	勅忠
第二次世界大戦			４１．１２．０８	
青森	根城跡（八戸城）	●	４１．１２．１３	南部氏の城
青森	七戸城跡		４１．１２．１３	建武の忠臣
戦艦大和竣工			４１．１２	
宮城	林子平の墓		４２．０７．２１	海防を国策として説く
戦艦武蔵竣工			４２．０８	
静岡	三岳城跡		４４．０３．０３	東海の官軍の拠点
鹿児島	高山城跡		４５．０２．２２	建武２年
敗戦			４５．０８．１５	

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

「五智国分寺」の道標が見た人たち

五智国分寺参道の入り口に立って、境内西側を北に向かう道の途中に、境内に入る細いクランク状の小道がある。その入り口の脇に「五智如来」、台座に「左かゞ道　五智」と彫られた石塔がある。正面右に「一見種子」左に「消徐罪業」、碑の裏側には、

文化十四年辰宿丁丑八月
策□□舜拝書

と彫られている。



五智如来の道標
上部の五智如来の梵字が刻まれている



台座に刻まれた案内

左　か　道　五ち

「舜」は、参道入り口の右に建つ「発菩提心」の碑の字を書いた「宥舜」ではないかと推理される。

宥舜は寛政九（一七九七）年から文政二（一八一九）年まで国分寺の住職を務めた国分寺中興九世である。文化一四（一八一七）年当時は隠居していた。

五智国分寺は過去に火災にあっているが、寛政六（一七九四）年には、本堂・仁王門・親鸞堂・庫裏・客殿が焼失し、加えて貞享四（一六八七）年に焼失して再建中の三重塔も焼失してしまった。

道標の建てられた文政年間は、それらの再建の途中の頃である。「五智国分寺資料調査報告書・資料調査編」（上越市教育委員会・平成二年）によって、再建の様子を見ることにする。

寛政七（一七九五）年　大日如来完成
寛政十（一七九八）年　親鸞像　国分寺再建のため江

戸へ出開帳（この時、東本願寺門跡によって「親鸞像」とされる）

寛政十一（一七九九）年　阿弥陀如来完成

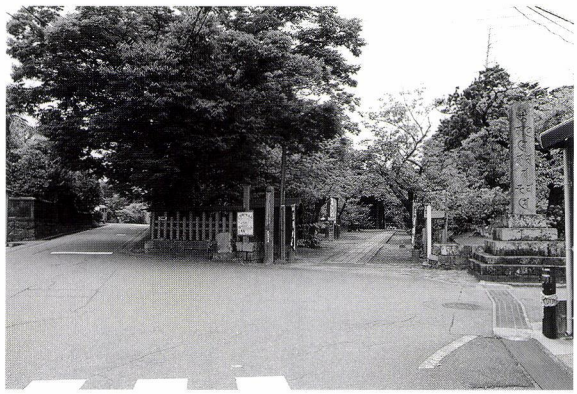
寛政一二（一八〇〇）年　釈迦如来完成

享和二（一八〇二）年　薬師如来完成

文化三（一八〇六）年　宝生如来完成

文政三（一八二〇）年　親鸞像江戸へ出開帳

天保九（一八三八）年「加賀公奥方本堂参詣の事」



国分寺参道前
左手の道の先に窪みに下る道が加賀街道



白線の左を下る

天保十二（一八四一）年　入仏供養

慶応一（一八六五）年　三重塔上棟

薬師如来は顔、宝生如来は両手が焼失を免れ、新造の時に再利用されているので、それらを基準にして他の仏像も制作されたものであろう。

「左かゞ道」

「かゞ道」とは北陸道のことで、国分寺参道入り口から、道標が置かれている境内西側の道を二、三〇メートル歩くと左手に下り、居多神社の北参道を横切って西に向かう道がある。それが加賀街道である。加賀前田氏の参勤交代の道であることから、誰言うとなく「加賀道」あるいは「加賀街道」と呼ばれることになった。

この加賀街道を歩き、五智国分寺を参拝して西へ東へと旅した江戸時代の旅人を見てみよう。

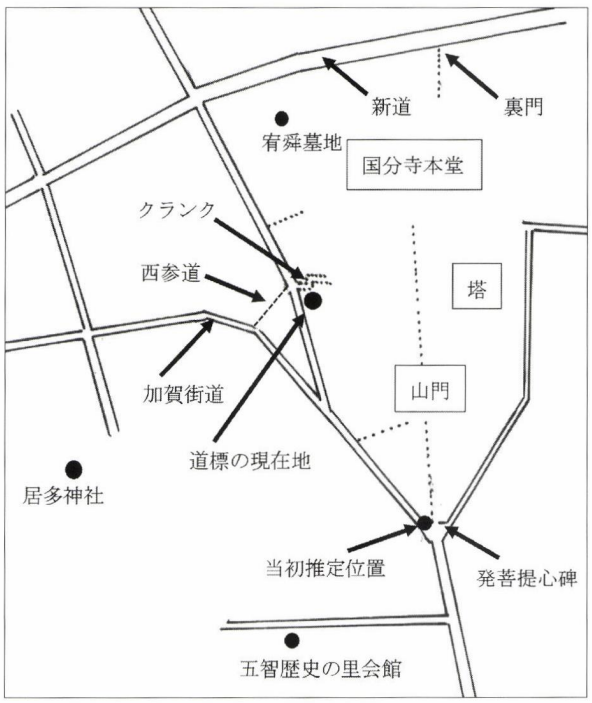
松尾芭蕉は元禄二（一六八九）年、「奥の細道」の旅で直江津今町・高田を訪れて加賀街道を北陸へ向う道すがら五智・居多を参拝している。

二年前に焼失した三重塔の再建中であり、また、一〇月に落雷で焼失する本堂を参拝している。

文化一二（一八一五）年、「金の草鞋」紀行の十辺舎一九は、高田の高橋飴屋に逗留し、北陸へ向かう途中で五智に寄っている。

庄内鶴岡の豪商三井家のお内儀清野は、伊勢参りの帰り道を北陸道に採り、一九の二年後の文化一四（一八一七）年六月（新暦八月）十一日、五智を参詣している。

清野はこまめに記録（『きよのさんと歩く江戸六百里』として出版されている）を残しており、五智の部分を見





寛政から文化年間に造られた五智如来

阿弥陀如来　薬師如来　大日如来　宝生如来　釈迦如来

ると、

一〇日、糸魚川を立って名立に泊まり、一一日は、善光寺に寄り道しようと高田城下を通過して新井に宿泊している。

清野は昼前に居多の浜に到着し、まず「親鸞聖人の日の丸の名号」を拝んでいる。「本山の上なりしが、人に拝ませ給わんがためなり」と書いているので、おそらく居多神社に置かれていたものであろう。「片葉の葦あり。百文にて開帳」と続いていて、名号と合わせて百文ということであろうか。

「五智にて飯を食い」は、門前の茶店で食べたのであろう。食べ物に関しても細かく記録しているのだが、残念なことにどんな昼食だったのか、書かれていない。

次に「五智如来様に参る。大仏、五体なり」と五智如来を参拝している。

寛政六（一七九四）年に本堂が焼失すると、五体の如来像が次々に制作され仮堂に納まっていた。清野が参拝した時には本堂も出来上がっていたので、新本堂に並んでいたのだろうか（入仏供養は天保一二年）。続いて「御開山様御木像」、つまり親鸞聖人の像を拝んで百文であった。

ちなみに、この再建の時、今まで東向きだった本堂を加賀前田公の参勤交代の折に遥拝していただくため、南向きに変えたと伝えられている。

道標は、清野が加賀街道を通って国分寺を参拝した二か月後に建てられている。

旅人ではないが、直江津今町の天才的狂歌師千代垣素直が天保六（一八三六）年七月一日わずか二〇歳で死去し、五智国分寺の三重塔の前の芭蕉句碑の奥に葬られた。すでに本堂が完成し、三重塔もかなり出来つつあったこ

ろである。

道標の位置の謎

道標が建っている前の道は、明治一六年に国分寺裏門を通る「新道」（旧国道八号線）が開かれた時、それに接続させるため開削されたものである。

国分寺の境内は厚い土塁に囲まれていて寺地としては不自然なので、国府などの館跡をある時期、寺地にしたものと考えられている。その土塁を切り崩して「新道」に繋げたと想像されるので、今の位置に道標があるのは不自然であるし、また「左かゞ」という表記もこの位置では不自然である。

脇道にそれるが、道標の脇のクランク状に切られた細い道は、土塁をクランク状に切ってあるので「虎口」だと言われているが、道の西側の崖の景観を考えるとこれも不自然である。通称「西参道」と呼ばれている細い急な坂道との関連性はあるのだろうか。

さて、道標は本来どこにあったのだろうか。

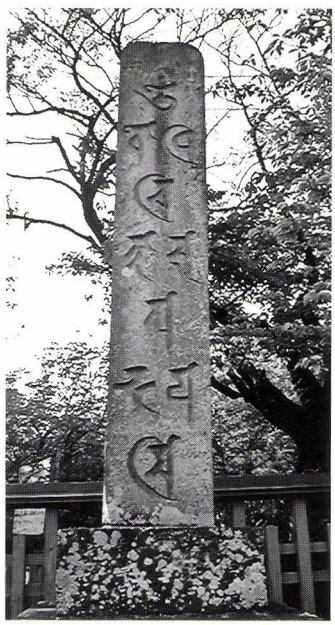
再建にあたって本堂を南向きにしたが、山門の再建は、天保六（一七九四）年まで待たなければならず、それに先立って参道を整備していく過程で、国分寺へ導く目印としての道標が必要になり、すでに隠居していた宥舜が揮毫して、おそらく参道入り口の左手に建てたものと推理される。

しかしなぜ、不自然な今の位置に移転させたのだろうか。そして何時ごろ。謎が残る。

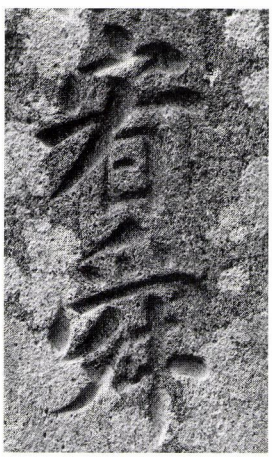
なお、道標は写真のように傷が入り、基壇も危険になってきているので、五智地域青少年を育てる会では、地域の子どもたちに歴史を伝えていこうと、上越市地域活動支援事業費の採択を得て、修復整備をすることになった。



道標の先に境内への道がある



参道入り口の左にある「発菩提心」の梵字が刻まれた碑



宥舜の名前が見える

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

三月十四日に「北陸新幹線」が開業し四ヶ月になります。

予想した事、予想しなかった事が見えてきました。

これからが本番です。

「上越市まち・ひと・しごと創生推進協議会」が設立、スタートしました。〝産業界〟〝行政機関〟〝大学〟〝金融機関〟〝労働団体〟〝民間団体〟が集まっての地域創生です。

知恵を集めて、エンピツ、クレヨン、絵筆を使って、上越に合った「凛とした絵」を期待します。（梅田）

目　次

特集1　旅する祭り直江津祇園祭　4
特集2　座談会・まちのこと祇園のこと　12
国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける
春日山城と越後府中　1
上越市専門学芸員小島幸雄　18
巻頭エッセイ・直江津の将来を思う独り言
籠島　幹　2
歴史は「今日」への手紙
「五智国分寺」の道標が見た人たち　27

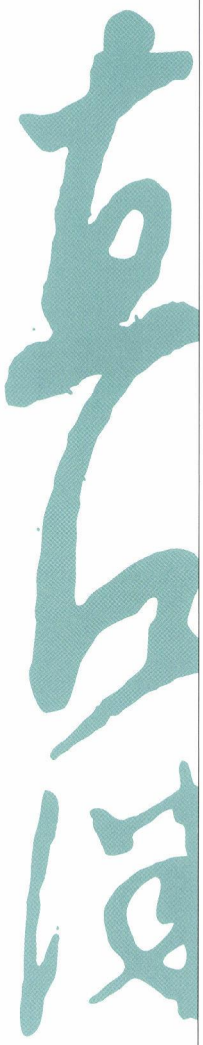
「直江の津」
第一一巻一号　通巻三六号
発行日／平成二七年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／荻野順次郎
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2015・1号

直江の津



発行／平成二十七年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円